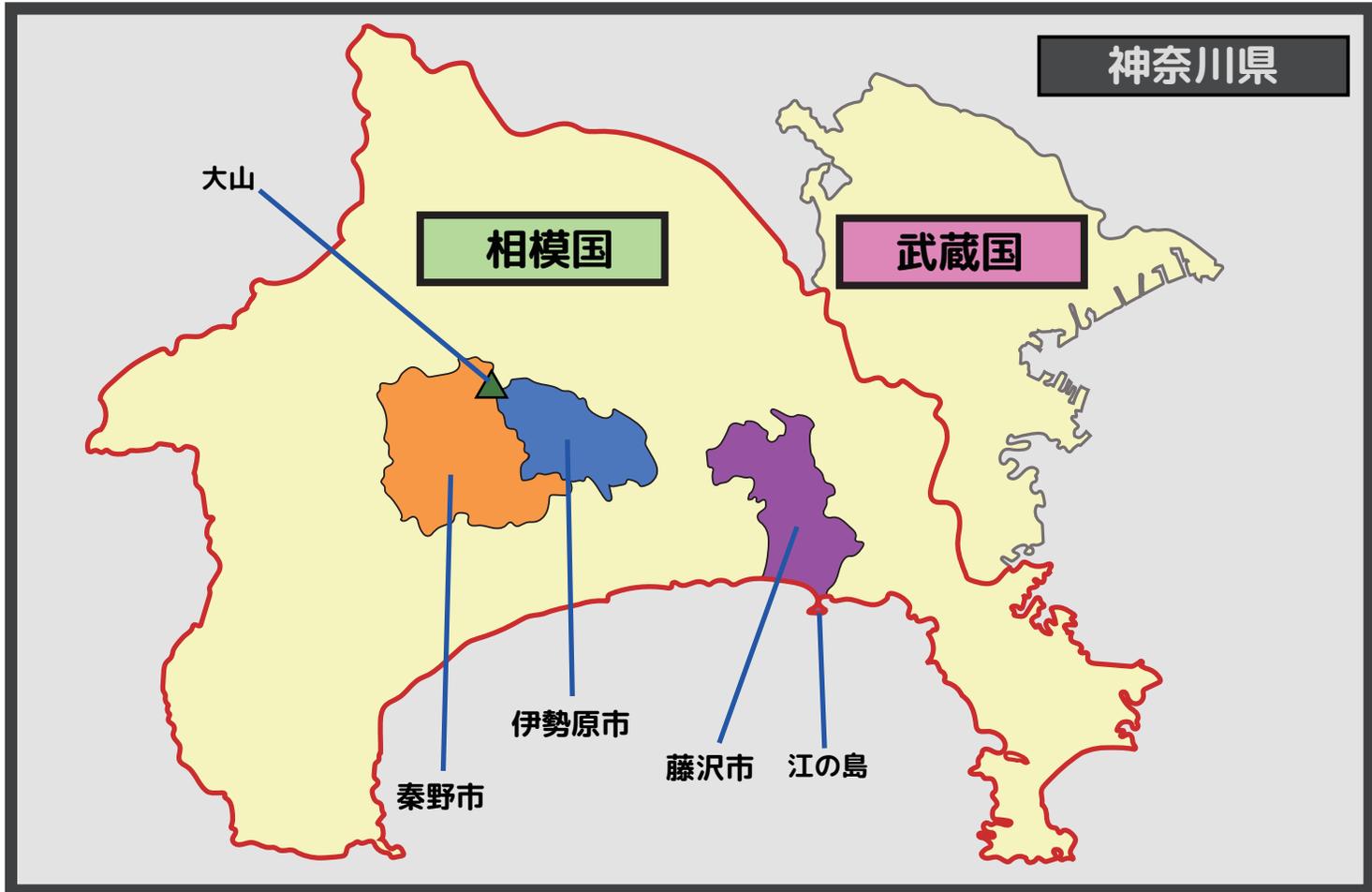


# 三市の浮世絵 大集合

## 浮世絵館だより

藤沢市  
藤澤浮世絵館

2020年  
12月  
WEB版



### 展覧会：相模を描いた浮世絵と狂歌摺物 2020年10月31日(土)～12月13日(日)

伊勢原市と秦野市と藤沢市の浮世絵が藤澤浮世絵館に集結した。相模とは相模国があった地域を指している。相模国は飛鳥時代から江戸時代まで存在していた旧国の名称で、現在の神奈川県の大分だ。

二〇二〇年一〇月三十一日から藤澤浮世絵館では「相模を描いた浮世絵と狂歌摺物」というタイトルの展覧会を開催している。「相模を描いた」とは何を指しているのだろうか。今回の展覧会の担当者に聞いてみたところ「相模の土地そのものに限らず、相模に生きる人々の文化を繋いでいることを示したく、『相模を描いた』と表現しました」という回答をもらった。

「実際に、今回展示している作品は、借用作品を含め、相模の土地そのものを描いたものが大部分を占めています」担当者が続ける。「ただ、私たちが伝えたいものは目に見える地形だけではありません。そもそも、浮世絵は全てがありのままに描かれているとは限らないんです。誇張された表現やあえて描かれなかったものも多いという。それでも浮世絵は購入されていた。それは、購入者もそういった「印象」のビジュアルを求めていたということになるのかもしれない。「同時代に生きる人々の『価値観』を覗き見ることで、それを私たちがそれぞれ撮取して落とし込むこと、それが文化を感じる一つの手段とも言えます」。

この文化を感じるということが今回の展覧会の肝にもなるようだ。

### 狂歌摺物と藤沢宿

狂歌とは、和歌のなかに滑稽や諧謔の精神を盛り込もうとする、戯れ歌である。また、摺物とは、注文によって作られた私家版のことをいい、狂歌に絵を添えたものを「狂歌摺物」と呼ぶ。狂歌は主に江戸の文化人たちを中心に流行った文芸だが、人の行き来が盛んになるにつれて地方へも伝播し、狂歌の師匠たちも広く弟子を募ったため、幕末には全国的なネットワークが形成されていた。

その一端に「相州藤沢」を名乗る狂歌師たちがいた。藤沢の「連」(グループ)の師匠格は、江戸の二世森羅亭萬象で、地域のリーダー格は宿場の旅籠屋(伏見屋)主人である森節亭里人だった。

また、江の島は狂歌師たちにとっては絶好の吟遊の地であり、二世森羅亭萬象が主催する卍連は魚屋北溪の絵による狂歌摺物「江島記行」シリーズを版行している。

今回の展覧会では藤沢ゆかりの狂歌摺物を一挙公開している。特に二代歌川豊国「題名不詳(大磯梅林図)」は、これまで未発表であったこともあり注目作品となっている。



二代歌川豊国「題名不詳(大磯梅林図)」  
文政年間(1818-29) 藤沢市所蔵

# 伊勢原市の「大山浮世絵」コレクション

神奈川県伊勢原市は市内に信仰の山「大山(雨降山)」を有し、その山頂の阿夫利神社(大山寺)への参詣道が「江戸庶民の信仰と行楽の地」巨大な木太刀を担いで「大山詣り」として、日本遺産に登録されている。  
同市ではかねてより「大山」と「大

代中期になると、商売繁盛や現世利益を願う江戸の職人や商人などの職業集団による参詣講が盛んとなり、庶民の旅の流行とともに、大山詣りは隆盛をみせた。その中で、大山詣りの帰路に江の島も訪れるという旅程が普及するなど「大山詣り」と「江の島詣り」は関

山詣り」に関連する浮世絵を収集してきており、「大山浮世絵」コレクションが形成されている。  
大山は古来より霊山として信仰の場所となっており、周辺地域においては雨乞いや五穀豊穡を願うなど、生活に密着して広く信仰されていた。江戸時

係が深く、信仰の対象であると同時に歌舞伎など芸能との繋がりが見られるといった共通点も見出せる。  
今回は特に参詣の道中の様子を描いた浮世絵作品を中心に、豊富なコレクションの中から厳選した作品を紹介する。



五雲亭貞秀「大山良弁図」元治元年(1864)伊勢原市教育委員会所蔵



五雲亭貞秀「相模国大隅郡大山寺雨降神社真景」安政5年(1858)伊勢原市教育委員会所蔵

## 藤澤浮世絵館の「江の島浮世絵」コレクション

藤澤浮世絵館のコレクションの根幹をなすのは、故呉文炳氏の「江の島浮世絵」コレクションだ。氏は、同コレクションを『江の島錦絵集成』(昭和三五年刊)として上梓しており、その解説文は江の島とその風光(景観)に対する憧憬の思いにあふれている。

藤沢市では、その後も着々と「江の島浮世絵」のコレクションを広げてきた。今回の展示では、呉氏がコレクションを集めた始めた時期の作品から、その一部を紹介する。

# 秦野市の「錦絵」コレクション



喜多川歌麿「吾妻美人あらみ松葉屋内喜瀬川」寛政後期(1795-1801)秦野市所蔵

秦野市所蔵の浮世絵コレクションは錦絵の変遷を概観できるようになっており、特にジャンルとしては人気の高かった役者絵や美人画が、時代としては鮮やかな色彩の江戸時代末期や明治時代のもものが豊富に所蔵されている。錦絵とは錦のように美しい絵という意味で、多色摺の浮世絵版画のことを指している。墨一色から始まった浮世絵版画は時代が下ると共に少しずつ色が加わっていき、今日私たちがよく目にする多色摺りの版画となった。

秦野市は、平成一〇年(一九九八)に東田原出

身の浮世絵収集家・故大津圓子氏から浮世絵約一九〇〇点の寄贈を受けた。

戦後、事業を興して成功した大津氏は浮世絵を少しずつ収集し、晩年



楊洲周延「雪月花 山城醍醐花 関白秀吉 淀君」明治18年(1885)秦野市所蔵

に故郷である秦野市に全て寄贈する。そこには日本の伝統的な美術である浮世絵を個人のものとして秘蔵するのではなく、次世代を担う若い世代に是非見てほしいという思いが込められていた。  
錦絵の変遷をながめることができる秦野市の豊かなコレクションを、ご堪能いただきたい。



二代歌川広重「相州江のしま詣の図」安政元年(一八五四)藤沢市所蔵